

日本最初の砲手ワルビーの航路と 極東での活動1894-1900

宇仁義和（東京農業大学），トルスティン・ショーボル（元ストックホルム大学）

A. A. Walby, the first gunner in Japanese modern whaling, his voyage and whaling activities in the Far East in 1894-1900

Yoshikazu Uni (Tokyo University of Agriculture) and Torstein Sjøvold (Formerly Stockholm University)



Her ser vi Torstein Sjøvold fra Sverige og Yoshikazu Uni med dagboken til Walby.

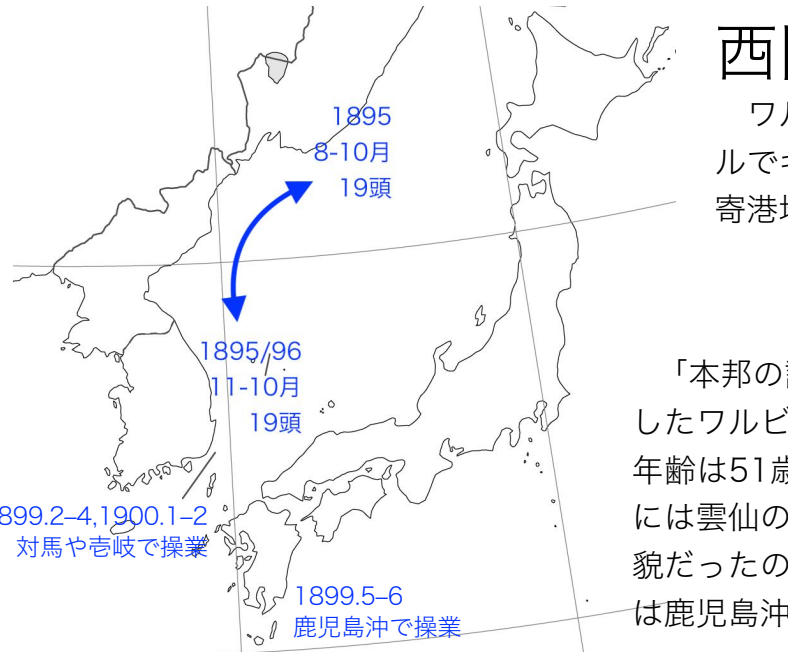
中央下の小冊子が日誌
ノルウェーのベストフォルア
ーカイブのウェブサイトから
（削除済ページ） 2016.11

背景

ノルウェー式捕鯨は1860年代に発明され、ノルウェーの捕鯨企業は世界各地の沿岸に拠点を構えて操業した。他方、極東では現地資本が捕鯨企業を設立、ロシアは1880年代からウラジオストク近郊で操業を開始、日本では1890年代に近代捕鯨が始まった。「本邦の諾威式捕鯨誌」（明石 1910）は最初の砲手は長崎の日本遠洋捕鯨株式会社に属していた「エー、エー、ワルビー」とする。本研究では、ノルウェーのアーカイブが収蔵するA.A.ワルビー（Anders Andersen Walby 1846-1931）の日誌の記述から彼のノルウェーからロシア極東までの航路、ロシア企業での捕鯨、そして日本での捕鯨や関連の活動について紹介する。

資料と方法

日誌はノルウェー南部のヴェスフォル県アーカイブ（Vestfoldarkivet）が所蔵する。記載された日付は1894年12月から1900年3月まで。原典はノルウェー語の筆記体の手書きで、Søvoldが英訳し、さらに宇仁が和訳した。地名や人名は聞き取ったとおりの記述と思われ、正しいと判断したものに比定した。



西回り世界半周航路

ワルビーはスエズ運河を通る西回りでウラジオストクに向かった。課題だった料理長はジブラルタルでギリシア人をスカウト、寄港地では水や食料、家畜を生きたまま乗船させている。長崎が最後の寄港地で、ここで家は靴を脱ぐこと、酒が弱い人種であること、などを観察している。

ワルビー老人？

「本邦の諾威式捕鯨誌」は長崎の遠洋捕鯨株式会社と契約したワルビーについて「老人」と記すが契約した1897年の年齢は51歳位であった。ただし、リウマチを患い契約直前には雲仙の温泉に逗留しており、加齢を感じさせる行動や容貌だったのかも知れない。遠洋捕鯨では冬に対馬や壱岐、夏は鹿児島沖で操業、日本海ではコククジラも目撃した。

沿海州から朝鮮沖の操業 長崎での補給と宴会

捕獲は到着した年の8月から始まった。夏は沿海州、秋から冬は朝鮮半島沖で操業した。翌1896年2-3月にはシロナガスクジラを捕獲したと記している。脂皮や肉は塩蔵で長崎に、鯨油はオデーサに出荷した。ケイゼルリンク伯爵は鯨髭を狙いセミクジラやホッキョククジラが居る樺太北部への出漁も計画したが実現しなかった。水や石炭は長崎で求め、同地はロシア軍人が多く宴会にも参加した。



上：1900年頃のガイダマーク捕鯨基地
右上：ガイダマーク湾の位置はナホトカに近い
右下：ガイダマーク湾の全貌。年代不明
<https://ok.ru/nakhodka.i/topic/67378881121124>



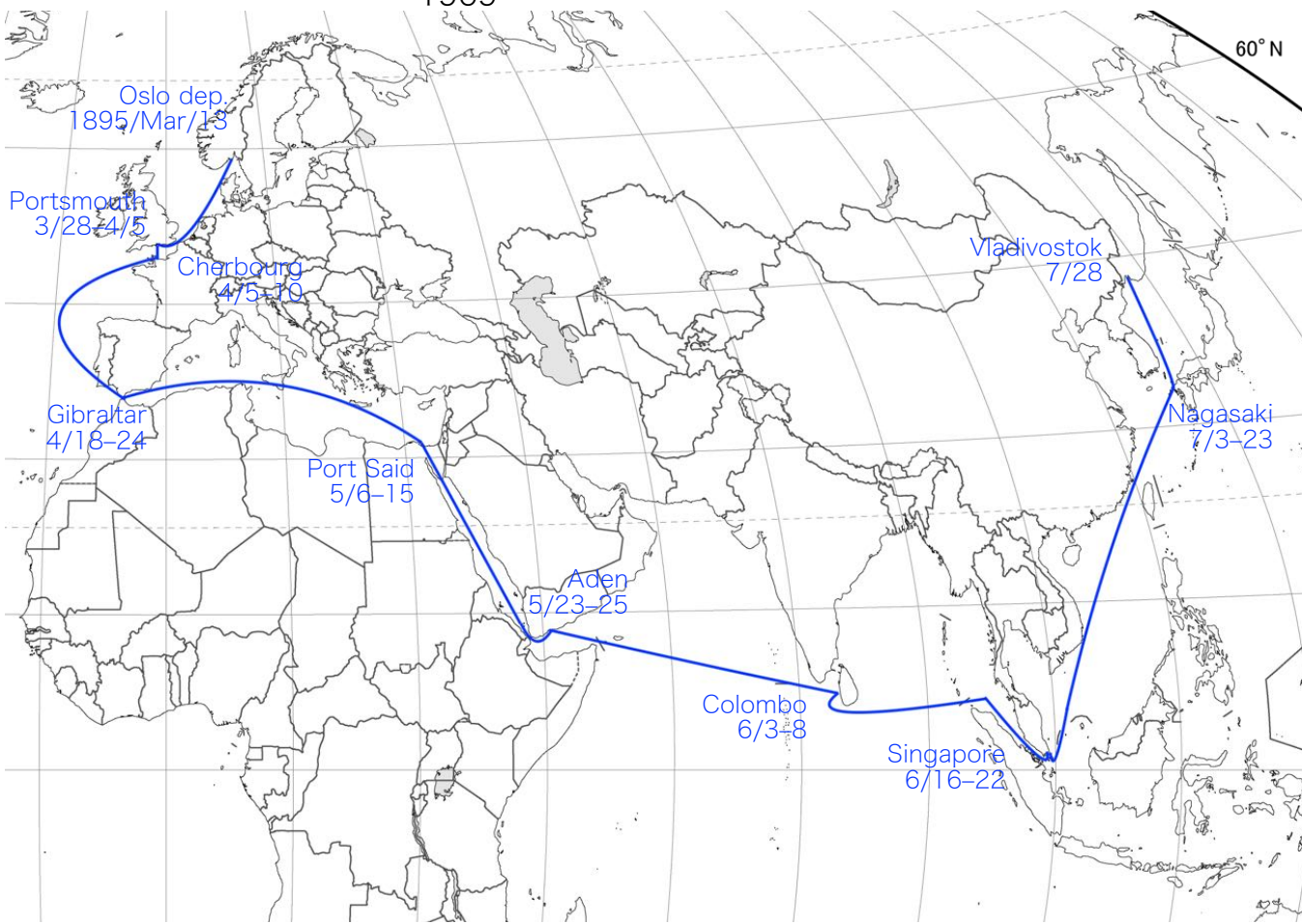
ガイダマークの捕鯨基地

ワルビーは捕鯨のディディモフと同じガイダマーク湾に捕鯨基地を求めた。が、先駆者の施設は水が無いとして湾の反対側を選定した。建設にはレンガ積み、大工、鍛冶など25人の日本人が参加したと記されている。ただし評価は高くない。中国人も10人以上、他に朝鮮人、ジョージア、ドイツ、スウェーデンなど70人以上の労働力があったとする。同地は現在ナホトカ市の一部となっている。2017年頃にガイダマーク湾の開発をめぐるフォーラムが開催された。写真はネット公開されている発表資料から。

近代捕鯨の歩み

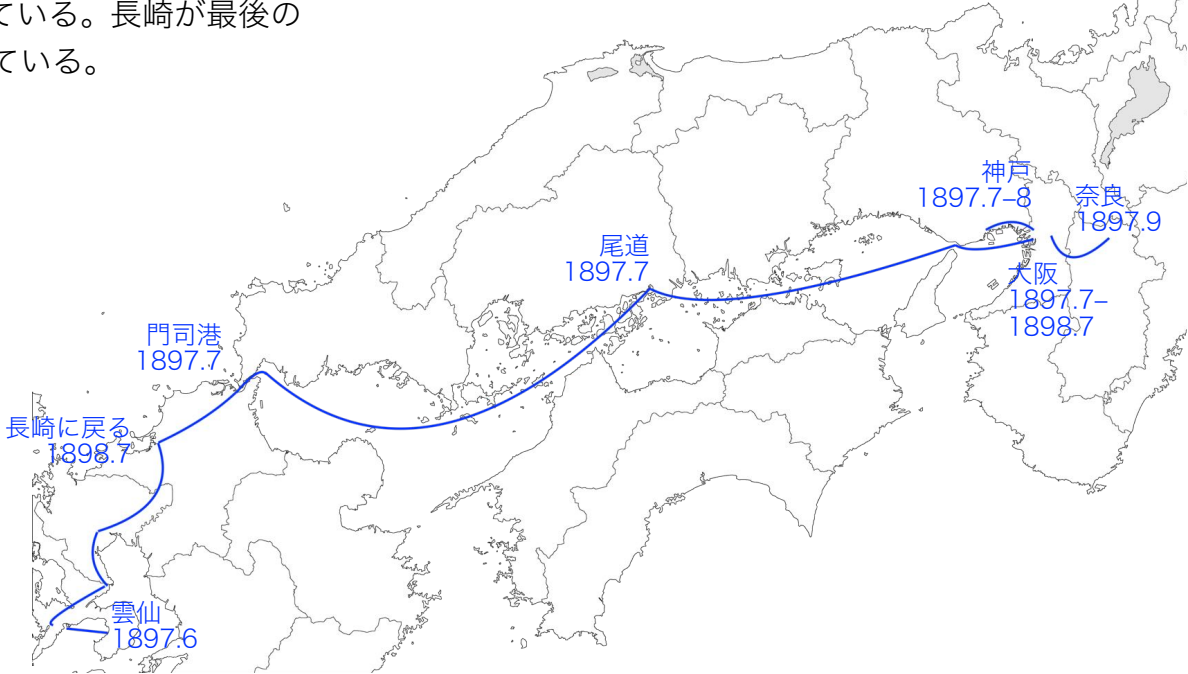
年代	ノルウェー	ロシア極東・朝鮮	日本
1860s	捕鯨砲発明		
1868			明治に改元
1889-1891		ディディモフが極東で捕鯨（1891.1に行方不明）	
1892	南極での捕鯨開始		
1898	カナダ大西洋で捕鯨開始		
1895		ケイゼルリンク伯爵が捕鯨開始（ワルビーが捕鯨事業の責任者）	
1897			ワルビーが長崎の遠洋捕鯨と契約
1899			日本遠洋漁業設立（後の東洋捕鯨）
1904	フィンマルク地方捕鯨禁止		
1905	スウェーデンから独立、ノルウェー王国なる		
1909			鯨漁取締規則施行、東洋捕鯨設立

日誌の期間



日誌の内容

日誌は次の4つの内容からなる。
①オスロからウラジオストクへの航海：1894.12-1895.7
②ウラジオストク近郊（現在の行政区ではナホトカ市）ガイダマークでの捕鯨基地の建設：1895.夏
③ロシア企業での捕鯨：1895.夏-1897.5
④長崎の日本遠洋捕鯨での仕事：1897.7-1900.3
記述では、ウラジオストクにはニコライとギョルギーの2隻の捕鯨船で航海しスエズ運河経由で来たこと、ガイダマークの捕鯨基地建設では日本人、中国人、朝鮮人ほか多くの国の人が働いていたこと、ロシア極東から朝鮮半島沿岸での捕鯨の記録、日本の捕鯨会社に勤務中には大阪に滞在して日本初の近代捕鯨船「烽火丸」建造の監督を務めたことなどが記されていた。また、休日（契約前後の業務空白期間）には雲仙の温泉や大阪からは奈良公園を訪問したことも述べている。
これらの記述は、日本人の名前を含めおおむね「本邦の諾威式捕鯨誌」と一致する。ワルビーの日誌は、19世紀末のロシア極東から朝鮮沿岸、そして日本の近代捕鯨の初期の様子を伝える唯一無二の一次資料として貴重である。



何事も時間がかかる日本人

1897年5月に伯爵の捕鯨会社を辞して長崎の捕鯨会社に勤める話がある契約が進まない。その間にリウマチの湯治で雲仙に滞在している。契約が済み、大阪で建造される捕鯨船「烽火丸」の監督の仕事で大阪に行くが約束した日になっても社員が来ない。時間が出来たワルビーは欧州人や輸入品を求め神戸を何度も訪れている。さらに奈良で観光するなど、当時の日本人の仕事の遅さや約束を守らない態度に相当いらだっていた様子がうかがえる。捕鯨船の建造時も何もすることがない日が続いた。大阪には結局まる1年滞在。捕鯨砲の取り付けはさらに半年後の1899年1月、長崎でのことだった。

課題

ワルビーの日誌の解読が進まないのが朝鮮半島の地名の比定である。近代史と捕鯨あるいは漁業の両方に明るい協力者を募集中。